

## 幕末における九州の万葉学：種信と廣足

春日，和男  
九州大学九州文化史研究施設

<https://doi.org/10.15017/7179476>

---

出版情報：九州文化史研究所紀要. 23, pp.25-53, 1978-03-31. Kyushu Bunkashi Kenkyusho, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：



# 幕末における九州の万葉学

―種 信 と 廣 足―

春 日 和 男

## 目 次

- 一 (1)万葉学の六人  
(2)種信と広足
- 二 青柳種信書き入れ「万葉考」より
- 三 中島広足と書き入れ本「万葉集」
- 四 結 び

## 一 (1)万葉学の六人

国語学畑の者として、多少歴史的な、というよりは、万葉集研究史の一端を述べることとなる。さぞかし未熟な点があり、また歴史とはかけ離れたことがらが介入してくると思うが、読者さいわいに諒とせられたい。

わが九州は、万葉集における太宰府圏という地域性において、極めて重要な役割を果たしていること周知の通りである。九州関係の万葉歌は三百余首、殆ど各巻にわたって散在するが、特に巻五における大伴旅人・山上憶良等いわゆる筑紫歌壇を中心とする百十四首に及ぶ歌群、および巻十五の天平八年遣新羅使一行の途上歌百五十四首等は顕著

幕末における九州の万葉学

なものというべきである。そこに活躍した万葉人も新旧数多く、白水郎や遊行女婦等、一般庶民から帥大伴卿旅人に至るまで、あらゆる階層の人びとを網羅していることも、万葉の性格上から当然ということになる。

しかるに、後世の九州人士は、往時の万葉の世界にどの程度の関心を寄せていたであろうか、総じていえば、意外に淡泊であったというより他ない。特に太宰府を擁する当地においては、万葉歌碑の建立も、他所に比して著しく遅れ、都府楼址における二碑、亀井南冥撰、「太宰府碑」(寛政元年)ならびに県令渡辺清撰「太宰府地碑」(明治十三年)いずれも菅家のことは叙しても、万葉の遺跡についての言及を見ない。因みに万葉歌碑の建立は極めて近年のことに属し、論外である。以上のことは、九州関係の万葉歌について、土地の人が注意を払わなかった事例となるであろう。

但し西陲の九州にも国学系のいわゆる万葉学者は輩出しているのであって、特に幕末における斯学の興隆に力があつた。けだし、南国土佐の地に、鹿持雅澄がでて、名著「万葉集古義」を残しているのに比べると、多少地味で目立たないという難はあるのである。数え立てると帆足長秋(宝暦七年—文政五年)を筆頭に、青柳種信(明和三年—天保六年)、長瀬真幸(明和二年—天保六年)、渡辺重名(宝暦八年—天保元年)、中島広足(寛政四年—元治元年)、船曳鉄門(文政六年—明治二十八年)等の名を挙げることができる。これを地域別にすれば、まず肥後の国学者流、筑前・筑後・豊前の国学者流、それに長崎を中心とした国学者流の三流が主なものとなる。

これらの中で、最も頭角を顕わしたのは、肥後における万葉研究であつて、中でも長瀬真幸は、本居宣長門下の俊逸であつた。彼には、「万葉集佳調」(寛政六年刊)と「万葉集佳調拾遺」(寛政十一年刊)の著があり、幕末から明治にかけて、いわゆる万葉秀歌六百二十八首の編書として名を馳せ、例えば明治四十年に、神戸弥作の著として「評釈万葉集佳調」が存するほどである。真幸は、賀茂真淵の「万葉考」の末尾に跋を載せていることでも有名である。

「万葉考」は、後述の通り、真淵在世中にでき上つた部分は、巻一より巻六までであり、これに別記三巻を加えて、残りの十四巻は、高弟野田諸成の手になる所が多く、特に真淵の草稿をもとにして、諸成によつて大成された。板本

「万葉考」の巻七に所載の天明五年二月十九日の序文は、そのことを明記してある（後記）が、真幸も「万葉考」末尾にそのことを記し、

いともうれしきままにその由いささかに巻のしりに書きつけつ。文政七年の八月の二十日あまり、肥後熊本長瀬真幸と結んでいる。この方面にいかにも真幸が重んぜられたかを知るよすがとならう。

長瀬真幸よりも十年程年配で、肥後の万葉学の基を拓いた人に帆足長秋がある。<sup>(1)</sup> 鹿本郡山鹿近在三玉村字久原の出身、家は、代々清原姓を名のり、天目一明神の神官を務め、真幸の宣長入門の仲介をした人であるが、彼自身天明六年、松坂に本居宣長を訪い、寛政三年入門、翌四年一旦帰郷、更に享和元年四月には、妻娘帯同して、宣長滞在中の京に上り、「古事記伝」以下多くの自筆原本の書写をなした。娘の名を京子（みさと）と呼び、才媛の名高く、時に十五才であったが、父の写本の手伝いをなして、欠くるところなく、宣長以下同門の人びとに可愛がられたことは有名である。長秋の飽くことをしらぬ書写の業は、やがて帰郷して「万葉集諸説」（寛政十年二月）の著となって一つの実を結ぶのであるが、「万葉集諸説」こそは、九州において著わされた万葉集全巻にわたる注解の書である。<sup>(3)</sup> 即ち二十巻にわたって、契沖以来の万葉における諸説を、既得の書写本または書き入れ本より採取して編し、諸説と名づけたものである。ただし、ここに注意すべきは、長秋以下九州関係の万葉学者は、当初、中央における通説乃至定説の吸収に専念したことであつて、既に「諸説」の名が示す通りであつたが、それは当然のこととはいひながら、なお自説の發揮に乏しかつたことである。もし自説がありとすれば、土地に囚んだことからの解説を手始めとせねばならず、九州の万葉学者の傾向として、それが一つの特色となつてゐることも否み得ないであらう。

ともあれ「万葉集諸説」には、現存する二三の写本があるが、青柳種信が文化七年六月下旬長崎において矢賀部直躬の本を書写したものが宗像神社文庫に蔵するところとなつてゐるのも奇しき縁といふべきであらう。

先に述べたように、長瀬真幸は帆足長秋の紹介により、はじめて宣長門に入るのであるが、両者の交友は歌集「本

名草」の中に

御別れにまゐらする 真幸

いはひつゝまたせ我せこ夏さらばいゆきもとほりはや帰りこむ

さくすすのその鈴屋は高くとも君がつくれる梯のまにく

右二首のかへし 長秋

夏さらば帰る袂を秋の野の千種の花のにしきとや見む

鈴屋の音は千里に聞こえけり己が作れる梯なくとも

とあるような贈答によつても明らかである。

長秋は在京中、折から上京していた豊前中津の出身渡辺重名と交遊した。彼は当初荒木田久老の門に入り、後天明七年、本居門に入る。また青柳種信とは、享和元年十一月、長秋帰郷の途次、福岡において相会している。かくて長秋は九州出身の後輩格の俊秀に感化するところ大となった。

長瀬・青柳・渡辺の三人は、後に九州における三大家と讃えられ、それぞれ宣長門下として、宣長校本の万葉集に自他の説を書き入れ、いわゆる書き入れ本「万葉集」を残した。種信の書き入れ本は、戦前福岡県立図書館の蔵するところであったが、戦災により焼失するに至り、重名の書き入れ本は、名のみ伝わって所在不明である。ただ真幸の書き入れ本は二三種類に及んで転写されて存し、ここに述べる中島広足書き入れ本の祖本となっていることも因縁である。例えば中島には、万葉集に出ている水島（三・二四五、二四六、長田王被遣筑紫、渡水島之時歌二首）の地について「相良日記」（文政十三年稿）「野坂の浦つと」（文政四年稿）に記するところがある。

此の水島は書紀にも風土記にも見え、万葉集のうたによまれて、いとくすしき島なるを、今もいと清き水わき出づり。ふるくは葦北郡とあるを、今は葦北、八代の郡境にありて、八代の方につけり。年を経て、海もあせたるに

やあらむ。今はしほひには、かちよりものすめり。野坂の浦は、さだかならねど、今の佐敷の津のあたりならむと或人のいへる、げに此の島までの船路五里ばかりもあれば、かの船出してとよみ終へるにもかなふべし。又和名抄に菊池郡に水島といへる地名のあるを、此の水島に思ひまがへて或人の万葉の注に引きたるはあやまりなり。菊池郡なるは、川のほとりにて、今も水島といひてあなる。此の海より二十里も隔りて山にそひたる所なり。

とある。万葉集の「水島」について現今の注釈書は「万葉集新考」以下多く、広足説を引用し、「略解」の菊池郡水島説や「古義」の郷名説を排するのが常である。しかし、この通説は既に広足書き入れ、「校異本万葉集」の原本たる、長瀬真幸書き入れに次のように見えるのである。

真幸云水島ハ葦北郡ニ在リ。サルヲ或抄、和名抄ニ菊池郡水島トアルヲ引ケルハ非也。菊池ニアル水島ハ古歌ニヨメルモノニアラズ。和名ニ出タルハ菊池ノ水島ニシテ今水島村トイフコレ也。コ、ノ節ニヨメルハ、北葦ノ海中ニアル一島ニテ、今ニ水島トヨビテ水アル也。菊池ト葦北ハ五十余里隔リテ同所ニアラズ。混ズベカラズ。

以上の通りであるが、ここには広足の書き入れはない。因みに「広足書き入れ本」の書写は、卷三の場合、まず真幸が「寛政六年十月七日、本居大人校本を以ちて写校し畢つた」ことになり、広足は「文化十五年四月十一日右校本を以ちて校し畢つた」ことになっているので長瀬真幸の書き入れは、中島広足稿の「野坂の浦つと」・「相良日記」よりも古いことになり、水島について、その所在が肥後の国学では、すでに自明となっていたことが看取されるのである。

さて、中島広足の弟子分にあたる人に、船曳鉄門なかつがいるが、筑後の人、三瀨郡鳥飼村の出身、大石御祖神社の神官で、橘守部の門人であった。彼には「万葉集倭文機」（明治十六年刊）の著があり、万葉の研究者でもあった。以上の六名をもって、幕末における九州の万葉学の中心的存在と見、それに、長崎諏訪神社の神官青木永章・近藤光輔等がいて、中島広足を彼の地に呼びとめて師範としたので、広足の学風、特に万葉学は、長崎に移されることになるわけである。現在中島広足の資料が、長崎県立図書館・諏訪神社等に残されていることは、大きな意義がある。九州に

おける幕末の万葉学は以上のように地域的にも、時間的にも、また人事の上からも、広汎にわたるのであるが、ここでは、特に種信と広足に焦点を絞りながら述べてみようと思う。種信は万葉学一筋に貫いた人といってもよく、それに比すれば広足は、後輩であるし、多面的才人であったがために、却ってその万葉学について後世粗略に受け取られている点が多い。一人は諸成編する万葉考に書き入れをなし、諸成へのよい補助者であったし、一人は真幸の書き入れ本「校異板本万葉集」に、更に書き入れをなし、共に自説を發揮した所が他に優れている。筆者はこの二人のうち、ここでは特に万葉広足説の紹介とその土着性を述べてみようと思うのである。但し二人の経歴についての概略はその都度記述することにする。

## 一 (2) 種信と広足

幕末の九州における万葉学に寄与した帆足長秋以下六名の国学者を紹介したが、彼等の多くは、赤貧と戦いながらそれぞれの門下にあつて、よく千余巻の写本をなして、飽くことを知らぬ好学の士であつた。このように彼等が中央における直伝の学問吸収に全精力を傾けた反面、なお自説の吐露に多少欠けるところのあつたことは、真に止むを得ぬものであつたかもしれない。しかるに、その中にあつて、青柳種信と中島広足は、年齢的にも、環境・才器・知名度等に多少の相違はあつたにせよ、よく自説を持ち、地方における万葉学の推進者であつたと共に、中央においても認められる所であつたということにおいて、やはり優れていたといふべきであらう。学としての万葉集は、結局は一方に偏するものではなく、全国的立場においてその価値が問われねばならないわけである。

さて、種信と広足が、万葉集について、どの程度の著作を残しているかとなると、その専門的研究書は挙げる事ができない。しかも万葉学者として、それぞれ別の著作の中で偶然、万葉に言及したり、引用されたりすることがあつて、それがそれぞれの説をなしているというような実情であつて、その点両者の万葉学はまことに地味であつたと

もいえる。

しかも両者ともに、歌人としての素養があったのは当然ともいえることがらで、どちらかといえば、広足が学問的に広い知識の所有者であり、天性派手な趣きを保有したのに対し、種信は、むしろ万葉一点ばりの好古癖の所有者であったと見てよい。歌にもそのことはよくあらわれているのであって、種信の歌集「柳園集」などを見ると、その根底は、鈴屋風の新古今調のものが多いようであるが、一方では、きわめて、万葉調の強くあらわれ、古語を混えたものが見られる。

泊瀬山もみち吹きまく秋風にいやすみのぼる月人男

志賀のあまの小舟つらなめはなりその荒磯の上に玉藻刈の見ゆ

大王の遠の御門と造らしし西の都は荒れにけるかも

のごときは、その最たるものであろう。これに対して広足は万葉調に執着できないものが多く、

木枯のしぐれをさそふ山のはのむら雲くろく照る月夜かな

霜どけのかわくばかりは照りもせで早くかげろふ夕づく日かな

等は、軽い奇智を弄した調子のよい歌であるが、彼の歌師一柳千古・本間素当等からは、歓迎されなかったというより非難された類のもので、この傾向は「しのすだれ」三における長崎の異国情緒を歌った長短歌にもあらわれている。

阿蘭陀の楽隊を見てよめる

えみしらが行きつつならずくだつゞみあなかしがまし何のしらべぞ

海路

大土を円きものとも知ることはめぐる船路のあればなりけり

幕末における九州の万葉学

等新知識にもとづく詠は、一つの特色ともなったが、結局、

春はただ花のところをとひとひて友なき身こそ友はありけれ

というような幽玄の境地に踏み込んだ新古今調のものがその基調となり、それに発想・用語等に新趣向を示したというものが、その歌風の概略であろう。両者の歌風を一概に論ずるわけにはゆかぬが、広足の作歌には、種信ほどの万葉調に徹したところは、まずまず見えぬのであって、これがまた、一方における万葉学の特色を暗示しているかのごとくである。

さて、両者における万葉学を比較するには、専門的な研究書が残されていない以上、前述の書き入れ本によるより他はない。九州の万葉学が多くそのような書き入れ本の上に伺えるという事実もまた、一方では九州の万葉学らしい特色ともなるが、幸い青柳種信には、種信書き入れの「万葉考」が残されており、中島広足には「書き入れ本万葉集」が残されている。但しこの二つの書き入れ本について、今まで、いかなる内容のものであるか余り明らかにされてはいないのであって、特に彼等の自説がいかにあらわれているか、についての具体例を示すこともなされていない。特に中島広足の万葉学説は、現在も余り紹介されるところが少ないように思われるので、以下に順次その特色を比較しつつ述べてゆくことにする。

【註】

(1) 「国学者伝記集成」続篇、一三六頁以下帆足下総伝・肥後先哲偉蹟を引用し精しく説く。

(2) その後京子(みさと)は、婿養子岡貞亮と結婚後、父母に背いて出奔し、長秋もそれがために妻と離婚するという数奇な運命に遭遇する。

(3) 戦前、九州大学国文学研究室において「万葉集諸説」出版の計画があり、業が進捗したが戦災によって中断されたという。

(4) 「略解」景行紀の該当記事を引用の後、「和名抄肥後国葦北郡葦北、菊池郡水島とあり。」と述べる。「略解」必ずしも菊池郡水島を強調してはいない。

## 二 青柳種信書き入れ「万葉考」より

青柳種信の伝記については、先人に説くところがあり、今はその概略を記すにとどめるが、明和三年（一七六六）二月二十日福岡地行に生まれ、天保六年（一八三五）十二月六日歿している。本名を種麿といい、後種信に改め、通称は勝次、柳園と号した。年譜に多少不明の点もあるが、幼にして井上周徳に就きて学を修め、寛政元年（二十四歳）の春江戸に出仕し、その途次伊勢松坂を過ぎて、本居宣長に見えて門下となり、江戸に至っては、大藏種信を名乗り、賀茂真淵の門人野田諸成について、国学特に万葉学を学んだ。他方、加藤千蔭・村田春海・青木菅根等とも交友し、学識愈々進んだが、郷里にあつては、賤家の出身たりしたため、藩公にとり入れられることも薄く、殆ど名を著さなかつた。むしろ江戸に在って有名であつたといふべきであつた。

野田諸成は山城狛の出身、狛翁と号したが、種信は諸成から県居の著述等諸本を借用して写すこと百卷に及んだという。ここに述べる「種信書き入れ本万葉考」もその一つである。今架蔵本によつて、その巻六の末尾にある識語を明示すれば

ことし寛政のはじめのとししはすの日鳥が鳴吾孀国なる大城の本 霞が関の邸中にて高麗宿祢大人みづからかきたまへる本をもて書うつしぬ 大藏種信

とあり、これは竹柏園蔵「種信自筆本」と同じである。つまり種信は寛政元年、江戸に入つて直ちに「万葉考」の諸成本を書写しはじめ、私案の書き入れをして寛政五年におよび、自筆本巻八（通行本巻七）の終りに

天明六年三月始而六月三日物晦尔中書畢ぬ 毛呂成六十四歳

寛政五年七月中旬書写之

青柳種満

同年八月廿日書入畢

幕末における九州の万葉学

と書かれてあることを以って、その証とする。種信は翌寛政六年二月には福岡に帰っているから、江戸仕役中、殆ど「万葉考」諸成稿本の書写および書き入れに従事したということになる。種信の万葉学は、この間に大いに進歩を遂げたものと考えられる。

さて「万葉考」なる注釈書は、一般に賀茂真淵の作るどころといわれているが、全巻にわたるものでないことは周知の処である。<sup>(2)</sup> 真淵の手になるものは、巻一から巻六までと別記三巻であって、これは宝曆十年三月（一七六〇）頃に成り、明和五年十一月以降（一七六八）に刊行されている。特に、巻七以下巻二十（「万葉考」の巻次による）の実質的な十四巻は、野田諸成が真淵の草稿本をもとに、高弟藤原菅根・同宇万伎・橘千蔭等の援助を得て、自説を加えて成ったものである。「万葉考」通行本の巻七にある野田諸成の記す序文は、そのことを明記してある名文として有名である。稲の収穫としてのわさ田、中で、おく手にことよせて次のように叙する。

（前承）

田ごとの段をあがちみるに、珥比磨利菟玖婆禰ならねど一二三のしなるおほよそをあげ云はば、あげ田、うゑ田、蒔田の三にざりける。そのあげ田や一つ二つの巻ならん。わさ田のわかなへとりうつしうゑそめしより、

いやちこに生さか行て穂なみよりたち蒔をさめて世に貢るがうましにごしねと、もてあそべるならし。それにつげるぞ中てちふうゑしうゑ田ぞ三四五六の巻なる。こも八束穂のたり穂とゑみさかえしを、此稲束蒔りをさめんずる秋ぞ悲しき事のきはみなる。此真淵年つみてかりそめなるみだりごちの日を歴てたのみすくなかるまにまにせんすべしらずくすしのたのみもつきぬ。つきよみの水いもりきてまたせんずる天つ梯はもたえ、かきくもり神な月ふきすさむ木枯風に散ながらふる黄葉の散りの乱ひに過ぎゆきしかば、ともがきら風晚しぐれの雨に打ひづる袖干もやらぬからに、此稲束なもくらにこめにたるならし。これにつげるおくて田やおよびをりかどなへて七八九十の巻ゆ、はたち巻の蒔田の中、十三の十六の巻なる竹取の翁の歌なも、三や六の巻のごとく真淵が生ふしたてたるなりけり。それが外はともがきらおのがうけ得し田ごとに真淵が齋種ゆだね蒔き生したる若苗のおひさき見えて、生出たるかぎりに

ぞある。云々

とあり、「真淵が友とせし藤原菅根にとひ、同じともなる藤原宇万伎がかいつけおける文らこひ得てこれをたつきに生したてなめと思ひなりぬ（中略）真淵が門べにあそべりし人多なるが中に一人二人のしなたる尾張黒生、橘の千蔭を田税の長として束結びつかねぬ。」とあり終りに

おのれが労は田草かりとり、田稗えりすて、たなひちに水なわかきたり、向股に泥かきよせぬるかもよかたらはしぬるかも、天明五年三月十九日 散位 狛少兄諸成と結ぶのである。

引用が多少長くなつたが、巻七以後の「万葉考」における記事の中には、次の

珠衣の狭藍左謂沈家の妹に物いはず来て思ひかねつも（四・五〇三）

には「真淵の考もあれど諸成案るに、狭藍の為は和岐の約にてさわかきわくを沈めて、といふなり」（考十三、書き入れ本同じ）のごとき諸成案がしばしば現れるのである。そのような例を少し挙げれば、

古の人の令食有 吉備能酒 痛者焉便無 貫簀贈牟（卷十三、八四・五五四）<sup>(3)</sup>

における「吉備の酒」の注に、

或人云この比火の国の人のいへるを聞に、彼国にて黍もて作酒あり、然は吾国にはなしとはいひがたしといふもあれど、諸成案るに後の世には唐にて作る物何物もうつしなせり。奈良朝の比、然はあらじかし。

とある。これは、書き入れ本では上欄補入の形で載せてある。

去采兒等 倭部早 白菅乃 真野乃榛原 手折而将婦（卷十四△三・二八〇▽）

「白菅乃」の条に

真を下へめぐらしてしらすげの真といひかけたり。冠辞かといへどおぼづかなしと真淵いへり。猶清良諸成案に菅

幕末における九州の万葉学

には姫菅、野菅、山菅など数多の中に此白菅のみきらしかわかつて笠にも縫なれば、白菅まことの菅なれば真菅とはかさねけん……

とある。ここは書き入れ本も板本も全く同じである。但しすでに「考十三卷四・五〇三」で引用したように、諸成説の本領は、真淵の系統を引く、一種の音約説であつて、そのような例は、

吾毛念 人毛莫忘 ワスルナ オホナワニ 多奈和丹 ウラフクカゼ 浦吹風之 ヤムトキナケレ 止時無有 (卷十三八四・六〇六)

における第三句目「多奈和丹」について次のような音約説を展開する。

諸成案に於保奈和尔の奈は尔多の約にて於保爾多和爾てふ言を約めいふなり。則凡爾機オホニタワにの意にて凡に多和多和にやまず吹うら風をいふなり。

とあるがごとくである。種信がこれに追隨して、音約説を披瀝したことは次のような解にもよく伺えるのである。

花咲而 実者不成登裳 ナラネドモ 長気 ナガキケ 所念鴨 山振花 (卷七八十・一八六〇)

第三句「長気」に対して、板本で

気は来経キヘの約にて長き月日も年も気経たるをいふ言ならんと吾友大藏種信がいひし。

とあり、種信の名がそのままであるが、考卷七は、既述のごとく諸成の手が加わった初巻であるから、どこまでも諸成の友種信いかと思われ勝ちであるが、考卷七は、既述のごとく諸成の手が加わった初巻であるから、どこまでも諸成の友種信の意とみるべきである。ところで、この箇所は、当の種信書き入れ本ではどうなっているか調べてみると、「花咲(か)ば日ごとにとこめでらるゝ花といふのみ」とあるだけで、他に注するところがない。恐らくこれは、諸成の初稿本の示すところであつたと思われる。考卷七にはその他に四首(十・二〇一七、二〇三八、二〇三八、二〇七九)「気長」の字面がでてゐるが、それらについても別に注するところはない。ただ

真気長 マキガタ 恋心自 コハルココロニ 白風 イモガトキコ 妹音所聴 ヒメトキユカナ 紐解往名 (十・二〇一六)

において、初句「真氣長」につき通行板本によれば「既に氣長てふにいひし如く、此氣も來経を約云。年月日の來経も久にこひしといふなり。」と見え、そこを書き入れ本に対比すると、「氣は加、古呂の約古なるを、氣に通はしいふにて、まころ長といふに同じ」と見える。「氣」の「來経」説にせよ「古呂」説にせよ、今日の学説としては到底受け入れられないものであるが、少なくとも「万葉考」の諸成稿本には、そのような珍奇な約音乃至転音説があらわれていて、それを板本は種信説によつてすべて説こうとするのである。このように種信の説は、きわめて地味ではあるが、「万葉考」の中にとりあげられているのである。

丈夫跡 念在吾哉 水荃之 水城之上爾 泣將拭（卷十五八六・九六八）

この歌について通行板本は次のように述べている。

諸成云、吾友大蔵種信は筑前国早良郡岡の者なり。種信云水荃の水城と集中によめると水荃の岡とよみしは別地なり。水荃の水城とは、水くきのみづくしきとかけたる意歟、此地は博多津より太宰府へ行道にて異國襲來の防堤なり（中略）其（天智三年）十二月に於對馬島壹岐島筑紫国等置防与烽又於筑紫築大堤貯水名曰水城と有是なり、今其池を見るに博多の南二里半斗に南往還の左右東西に長く連なる堤有て林木しげれり、道の側に関門の礎残り堤の内今は田となりて、三村有北の出口なるを下水城といへり、中間に有を瓦田村といふ。南の入口に在を上水城といへり、上水城にも同じく堤有て今の三村の地全く古の水を貯たる池中にあたり、其長さ南北十四五町東西七八町有是なり。

「種信云」がどこまでであるか、やや不明の点もあるが、考の記述として、水城の説明は珍しく臨地的で詳細である。恐らく諸成が種信に土地の有様を質しつづ記したものと解して過誤はないであろう。種信の面目まことに躍如たるを覚えるのである。

さて、天平二年冬十二月、帥大伴卿の京に上るに際して遊行女婦兒鳥と贈答訣別したと伝えられるこの一首は、種

信書き入れ本の考には、「諸成云」以下全部を欠如している。この事実は現在見られる通行板本の「万葉考」には諸成説の補入がかなりあることはもとよりであるが、種信書き入れ本が「万葉考」の草稿としての性格を強く有することの証拠ともなるであろう。更には、種信本に種信説の記入がないことはむしろ当然であって、諸成は種信との対話による知識を取り入れて、通行本の体裁に造り上げたといえてもくるのである。

しかし、諸成の手になる通行板本は、必ずしも右のように種信説について有利なことばかりではない。種信本「万葉考」に見られる種信説は、多く諸成本の書写後の書き入れによるものであるため、通行板本には取り上げられることのなかったものも少なくないのである。

荒津海 吾幣奉 将斎 早還座 面変不為（巻五、八十二・三二七）

における通行板本の記事は「これは筑紫人の京に仕奉るとて上るをりならむ、面変りせでとは、年経べきよしなれば、国の仕の朝集使などにてかりに上るにあらず。」とあって、種信本と同様であるが、種信本はその上欄に書き入れがあつて、次のようになっている。

諸成云、荒津は筑前早良郡にあり、今の福岡の城の海浜に御山てふ海中にさし出たる山あり。荒津山是なり、そのあたりを今荒戸といふ、博多に近し、志賀島には海を隔て三里あり、今もこの津より舟すれば、志賀と残しまとの間の海を通りていづこにも行なりと種信がいへり。

これは真実諸成の筆録か、種信の書き入れであるか、多少はつきりしない点もあるが、恐らく前者と見るべきであろう。結局、通行板本には入っていないのであるから、種信との対話によるものは、取り上げられなかったと見るより他ない。特に九州の万葉地理に関する記事は、詳細にわたる内容を上欄に書き入れてあるが、考の板本には取り入れられなかったものが多い。そのような例は特に考巻五（万葉十二巻）には多く見られる。

悪木山 アシキヤマ 木末悉 コズヘコトト 明日従者 アシタスヨリハ 靡有社 ナシキタリソ 妹之当将見（十二・三一五五）

板本は「肥前の蘆城山なるべし。末の巻に出」とあるが、種信本は「筑前の蘆城山なるべし、末の巻にも出ず」と国名が正しく記され、上欄に「悪木山は筑前にあり古へ太宰府より京へ上る駅なり。今之蘆城てふ里の名あるよし、青柳種信がいへり」とあるのは通行板本に取り入れられなかった。

— 霍公鳥 飛幡之浦尔 敷浪之 屢君乎将見因毛鴨 (十二・三二六五)

板本「筑前風土記の水茎岡の条の海に、鳥旗てふ所あり是か、或説に志摩の鳥羽を引しはかなはず。」とあり、更に筑前風土記の原文を引用するが、その引用は種信本では、上欄に補入書き入れてある。種信本は、続けて上欄に「諸成云今も遠賀郡若松てふ浦の向ひに鳥旗てふ浦ありて風土記の能くかなへりと種信がいへり」とあって、種信の言は板本で排せられた。

— 思香乃白水郎乃 釣尔燭有 射去火之 髣髴妹乎 将見因毛欲得 (十二・三二七〇)

思香乃白水郎 (志賀の海人) については、通行板本「筑前」とあるのみで、種信本も同じであるが、上欄に「諸成云、神名式筑前国那珂郡斯加海神社三座名と有、此御神の事は、記及紀にも見たり。伊弉諾尊、櫛原の御稜の時あれませし九神のうち、底津少童命、中津少童命、表津少童命の三神まします、今は志賀明神といふよし種信がいへり」とあるのは載せられなかった。

— 豊国乃 聞之長浜 去晚 日之昏去者 妹食序念 (十二・三二一九)

通行板本「是も筑紫人なるべし」とあるが、種信本上欄に「諸成云、企救の浜は、豊前国小倉の西北の浜辺を今もさくの浜といふ、此あたり企救郡なりと種信がいへり」とあるのは、載せられなかった。

つまり、このような処置について、種信は出身地九州の万葉地理を熟知していたので、この点諸成の「万葉考」執筆にあたって、相談役とはなったであろうが、それは一地方に偏する土地の知識として、とり上げられることのなかったものと考えられる。

ただ種信本でわかることは、野田諸成の説なるものが通行板本の中のどれであるかが多少とも暗示されていることである。それは、「諸成案・諸成云」等の表記で巻九・（巻五）巻十三（巻四）等にしばしば示されているのであるが、中にその明記を欠くものがあり、それらが種信本を披見してはじめてわかるというようなことにしばしば逢着するのである。例えば、

防人の 堀江漕ぎづる 伊豆手夫禰 梶取る間なく 恋はしげけむ（二十・四三三六）

一字一音式表記なるがため、表意的に書き下しにしたが、その第三句目について通行板本は「伊豆手の手は都久礼の三音を約しいふなり」という音約説が述べられている。これなど、種信本上欄に、「諸成云」と頭書して出ているものであって、やはりその出自は諸成であることが明らかである。しかし諸成説はいつもかかる場合荒唐無稽であったかというに、必ずしもそうではない。

吾妹兒尔 恋為コヒ便名ナカリ雁 曾乎熱 且戸開者所見霧可聞（巻五八十二・三〇三四）

第二句目の「名雁」について、通行板本は「加里の約は伎」とのみあるが、種信本の補入には「諸成云加ハ久阿の約也」という一往正しいと見られる音約説が加えられている。

客在而 恋者辛苦 何時毛 京行而 君之目乎将見（十二・三二三六）

通行板本「男の国の任に在てよめるなるべし」とあるが、種信本「諸成云女の父又先にいざなはれて父その任の國にて女のよめるか」とあるのは、種信が真淵原案よりも諸成説を正しとして改めたものと解せられ、「君」という語の使いざまからもそれは肯なわれるのである。

以上をまとめてみると、第一に、通行本「万葉考」の中には、野田諸成説が多く採用され、特に巻七以下に著しいが、中には諸成が青柳種信の説をそのまま採用紹介しているところもある。但し諸成が板本に種信説を掲載するについては、一往取捨吟味の操作がなされ、その際、廃棄されたものも多い。

第二に、種信書き入れ「万葉考」には、真淵の原説を改めたものがあるのは、多く種信の所作と思われるが、それらの中の過半は、通行板本には採用されていない。従つてそれらは種信が独自に書き入れたものと考えてよく、その意味において、種信書き入れ「万葉考」は九州万葉学の色彩が多少とも強く感ぜられるものである。

さて種信本「万葉考」について、特に注意されるのは卷九（卷五）において、種信自身のそれとなき改書が著しいことである。いうまでもなく万葉集卷五は、九州特に太宰府を中心とした地域が舞台となり、人物としては大伴旅人・山上憶良等ここに活躍した万葉人を枢軸としているために、青柳種信にとつては郷土の顕彰であり、最も力を入れた巻であったといふべきであるからである。いわゆる日本挽歌一首（五・七九四）の「大王能 等保乃朝廷等」と歌い出す冒頭は、

狛翁云 遠つ国にては、その国府を遠の朝廷といふなり、みかどとは天皇のしろしめす国の府なれば、しかいへり、必ず京都のことのみにあらず、新羅・高麗・百済にもいへり、ここは筑紫の大宰府をいふなり。云々

とある。これを通行板本に照合するに「ここに豆を入れて心得よ。みかどとてなり、遠つ国といへども、しろしめすところは皆みかどなり、されば新羅・高麗とても云なり。」とあつて、至極淡々としかも正論を開陳するのである。種信本では、別に「狛翁云」と断わらなくても済むところであろうが、種信の狛翁（野田諸成）にいわば花を持たせた所と見るべきもので、これは卷九（卷五）を通しての一貫した態度ともなっている。実にこの卷五を解する「万葉考」卷九は種信の「万葉集種信抄」であることがいえるのである。

それは通行板本の「万葉考」がとり上げなかつた、漢文の辞句に対する訳注が種信本に詳しく書かれていることにも裏付けられるが、今は省略に従い、種信本が地名の解に詳しくそれらが通行板本では、簡略になっている例を上げる。

大野山 霧立ち渡る 我が長息く おきその風に 霧立ち渡る（五・七九九）

意をとつて書き下しにしたが、大野山については、通行板本「筑前国御笠郡」とのみであつて、種信本は「筑前国御

笠郡大宰府近き地也。和名抄云御笠郡大野郷、卷十三に大宰大監大伴百代の歌に不念乎思常云者大野有三笠柱之神思知三とよめる同じ地なり」とある。

梅の花 散らくはいづく 然すがに 許能紀能夜麻爾 雪は降りつつ (五・八二三)

梅花歌三十二首の第九首目(大監大伴百代)の歌である。第四句目は「この城の山」と従来解せられ、通行板本で「筑前国下座郡三城の山、即城山なり」とあるのみで、指摘するところもやや明確を欠くが、種信本葛井連大成の「城山道者不楽牟」(四・五七六)の歌を引き「筑前国御笠郡にあり」とあって、上欄に「種麿云 城山ハ肥前国基肄郡にあり、筑前御笠郡と界接す。統日本紀卷之一文武二年四月甲申令大宰府繕治大野基肄鞠智三城と此なり」と的確に指示する。但し現今の説では、基肄山を排し、大野山、即ち四王寺の城山を指すこととなっている。

比等母禰能 うらぶれをるに 龍田山 御馬近つかば 忘らしなむか (卷九八五・八七七)の第一句「比等母禰」について、通行板本は

ひともねは母禰約に米にて人目なり、人目のうらぶるとは、人の面のうらぶれなり、面を目といふは、妻の目を欲り、又目欲君などいふに同じ、或説にひとも禰はひとむね音通にて一家をいふといへるはつぎの説ならん(人皆歟、母は美と同、禰は奈に同ければ、古には人皆のと云歌歟)

とあるが種信本によれば「ひとむね(一家) 説および「ひとみな(人皆)」説が両方真淵の説であることを明らかにし、「母禰約米」説、つまり「ひとめ(人目)」説が諸成の説であって、彼は「ひとむね(一家)」説を次説としていることがわかる。種信は、「種満案るに、賀茂大人の人皆のといひおかれしかたよろしからんか、さ心得る方あきらかにして義もとほれり」とあり、またそれが宣長説とも相叶うことを、「種麿今按に本居大人の説、偶予の説とあへり」といつて宣長説を朱書紹介している。

因みに「人皆」の説は、既に下河辺長流の「万葉集管見」に「ヒトモネハ、人皆也。もね、みな、共に五音かよへ

り」とあるのが古く、「略解」に「宣長云母禰は弥那を下上に誤り、又那を母に誤れるなるべしといへり」とあり、「攷証」の頭書に「この巻にも國の法（方）言をいへる事、これかれあれば、人皆の法言にてもあるべし」とある。次の八七八番の歌に「等乃斯久母」（乏しくも）とあるのと同じく、古代九州方言の一形態を示すものと見るのが今日の通説である。

種信本「万葉考」の改書個所は、巻五に相当する考卷九において特に著しいのは青柳種信の九州色豊かな点であったといえる。それがこの人の学問にプラスするところともなり、ある面では、極めて地味な「縁の下力持ち」的存在として、野田諸成説を世に紹介し、自説は却ってとり上げられなかったというがごとき不利を将来しているようにも思われるのである。先に長瀬真幸によって「万葉考」の跋が書かれ、その完結を見ているのと同じく、「万葉考」の内容にも諸成を通じて、種信の関与する所があったことは、九州の万葉学の一面を伺わせるに足る事実であろう。

### 【註】

- (1) 福本誠著「筑前志」、一六八頁以下、武谷水城「筑前の国学と青柳種信」春日政治「青柳種信の事ども」（「能古」昭和五年一月、「青靄集」所収）。
- (2) 校本万葉集巻首巻下「賀茂真淵の万葉注釈書」二 万葉考四三八頁以下。
- (3) 以下、巻数は「万葉考」のもの、数字は、万葉集の巻次および、国歌大観番号を示す。また傍訓は「万葉考」のままに従う。

### 三 中島広足と書き入れ本「万葉集」

筑前福岡の青柳種信に比較して、彼より一世代若い肥後熊本の中島広足は、対照的な性格の人物であった。広足は、才気に富んだ颯爽たる印象を後人に与え、実際、語学・文学あらゆる面において優れた本居宣長門下の俊逸で、

幕末における九州の万葉学

博覧多識、文明開化の新しさにも好奇心を駆せ、万葉研究などは、この人のほんの一部分であったといっても間違いではない。特にこの人の学問的令名を高からしめたのは、何人も追隨を許さぬ語学力、つまり国文法の知識とその応用であって、このことが他の九州の国学者連の遠く及ばぬところであった。九州の万葉学もこの人を得て初めて学問の軌道に乗ったといっても過言でないように思う。

蛇足ながら中島広足の経歴については、寛政四年（一七九二）三月五日熊本に生まれ、元治元年（一八六四）正月二十五日同地に歿した人で、種信より三十年の後輩である。家は代々細川藩の家老で、その点も足輕相当の出身であった種信とは異なった。塩屋町裏小路の邸に父中島惟規（二百五十石）の子息として生長、幼名嘉太郎、惟清と改め、文化十二年春臣、文政十年以降広足（弘足）と改めた。文化三年元服、小姓役を命ぜられ、武士としての前途を嘱望されるまま翌、文化四年（十三歳）江戸に出仕、爾來数回の往復を重ね、見聞おのずから長じた。然るに文化十一年結婚以後、病弱に陥り、二十六歳にして、俄かに隱居の身となって、熊本島崎の屋敷に蟄居の生活を送る。長瀬真幸の門に入り、本居学を身につけたが、時運未だ巡り来らず、文政三、四年の交は失意の極であったという。然るにその後、青柳種信の門人岡部春平の來訪を受け、この人との交友が漸く前途に希望を懐かしめることになった。いわば種信との間接的な接触が武士よりも国学者としての人生に生甲斐を感じさせることになり、爾來、長崎・大坂と活躍の場所を変えて、その優れた天稟を發揮できたのであった。文久二年（七十一歳）にして帰国し、国学師範として時習館に務め、やがて歿するのである。<sup>1)</sup>

広足の万葉学については、歌書総覽に「万葉集略解補遺」という著述が見られるが、この本は世に未知のものであって、彼の万葉についての造詣は、むしろ晩年に著した語学書、「玉緒補遺」（手引の糸、嘉永五年刊）・「玉霞窓の小篠」（嘉永七年刊）・「詞八衢補遺」（蔭ふむ道）（嘉永六年）などに盛られた万葉歌の用例の数多いことがそれを物語っているといえよう。そういえば、「雅言集覽」の用例を補った「増補雅言集覽」（弘化二年頃稿）のごときも在来本に

見える用例の足らざるを補ったものであって、広く古今の文献に通じ、いわゆる博覧でなくては、できる業ではない。特に語法における用例の列挙、追加、更にはその応用については、天才的能力の所有者であったといふべきで、彼の「略解補遺」のごとき殆ど架空と思われる書目が存するのも無理ではない。あるいは、これから述べる彼の「書き入れ本万葉集」の奥書きにある文政十二年頃の「略解校合」のことをいうのであろうか。

例えば「玉緒補遺」にあつては、冒頭一之巻（玉緒二之巻）に「べく」という項目を立てて「玉緒には此のべくの証歌ただ二首を出されてあるのみなり」として、万葉歌

かた糸もて 貫きたる玉の 緒を弱み 乱れやしむ 人の知るべく（十一・二七九一）

以下八首、総計三十九首の補遺を行なつてゐるという具合である。「玉緒」が挙げた「留りより上にかへるてをは」の証歌二首とは、

山風にさくら吹きまき乱れなん花のまぎれに君とまるべく（古今卷八・三九四）

花のいろは雪にまじて見えずともかをだににほへ人の知るべく（同卷六・三三五）

という乏しきで、この末句にあらわれる「べく」の用例を万葉歌によつて多く補つてゐる。実に広足は、このような足らざるを補う名人であつたわけである。

さてこの用例を追加・補遺する態度は、「中島広足書き入れ本万葉集」にも遺憾なく發揮されている。この書き入れ本については、前野貞男著「万葉書誌学」（昭和三十一年）に、文政十三年七月十五日の条に「校異本書入」として示されているが、架蔵本では、各巻毎（一巻―三巻欠）に校合筆写の奥書を有する。巻二十の末尾に示されたものをそのまま記すと

本居大人校本奥書（朱書）

右万葉集二十巻以景山屈先生家蔵本校正之 至如冠註旁註亦皆拠其本 已此本也先生所自校正盖以契沖先

幕末における九州の万葉学

師代匠記<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>撰 如<sub>ニ</sub>其称<sub>ニ</sub>師云<sub>ニ</sub>則今并似閑翁之説也 翁亦契沖之門人也 先生与<sub>ニ</sub>似閑之門人樋口老人宗武<sub>ニ</sub>友善 是故先生以<sub>ニ</sub>其本<sub>ニ</sub>校正訓点冠註之 則実契沖伝説之義不<sub>レ</sub>待<sub>ニ</sub>代匠記<sub>ニ</sub>而明焉者也。故予深崇信之以<sub>ニ</sub>余力<sub>ニ</sub>写<sub>レ</sub>之蔵<sub>ニ</sub>巾箱笥<sub>ニ</sub>為<sub>ニ</sub>秘珍<sub>ニ</sub>矣 後之閱者勿<sub>ニ</sub>忽諸<sub>ニ</sub>爾

宝曆七年丁丑五月九卒業予平安室坊寓居

神風伊勢意須比飯高薺庵本居宣長謹

右万葉集二十卷諸説 以本居先生校正本写之

從<sub>ニ</sub>寛政三年辛亥十月廿八日<sub>ニ</sub>濺<sub>ニ</sub>筆<sub>ニ</sub>干勢州松坂寓居<sub>ニ</sub>迄<sub>ニ</sub>同年十有二月念八日<sub>ニ</sub>卒業 帆足下繪清原惟香

右以帆足惟香所携来之写本校之了

寛政七年九月八日卒業 長瀬真幸（以上墨書）

寛政六年二月廿六日於江門以<sub>ニ</sub>橘千蔭翁校本<sub>ニ</sub>校之訖 如<sub>レ</sub>称<sub>ニ</sub>元曆本<sub>ニ</sub>者伊勢松坂富山氏所蔵元曆元年所校之古本而

千蔭翁嘗以<sub>ニ</sub>彼本<sub>ニ</sub>所<sub>ニ</sub>校合<sub>ニ</sub>也。今乞<sub>ニ</sub>右校本<sub>ニ</sub>同校之畢

長脊真幸（以上朱筆）

文化十五年四月廿七日 以右校本校之畢

中島春臣（以上墨書）

文政十二年九月十七日以略解校合畢 広足（花押）（朱書）

となつてゐる。これは、そのまま肥後万葉学の系譜を示すものといえるであらう。但しこの本は、長崎諏訪神社大宮司青木永章の書写本であることが巻十の奥書などでわかる。また巻十六には「天保十年九月校合畢 船曳大滋」とあるので、大滋の手にも渡つたものであらう。本居校本を帆足長秋が書写校合し、長瀬真幸の書写校合となり、それに広足が書き入れを朱筆をもつて行ない。更に一部青木永章、船曳大滋の手を経ているから長崎出自のものである。

さて書き入れの中に「春臣按・広足按」という朱筆が入っているのは、中島広足の説であると見るべきであるから、今その中の主なるものを列記して、彼の万葉学の傾向を指摘して見ようと思う。

まず広足の書き入れにとつた補遺的態度として、類歌類例の提示が非常に多いということがある。例えば、万葉集巻五・八九七にある「老身重病経年辛苦及思ウレハサマヨヒ兒等コトコトハ歌七首」の長歌中に「憂吟比シナナトオモヘド許等許等波コトコトハ斯奈奈等思騰」(校異本三十八オ)という歌詞がある。その上欄書き入れは

春臣按 許等許等波ハコトナラハト云ニ同シク如此ナラハト云意也 卷七コトサケハ沖ユサケナム(一四〇二)

卷十コトフラハ袖サヘヌレテ(二三二七)、十一巻コトトクハ中ハヨトマシ(二七二二)、十三、コトサケハクニ、サケナム(三三四六)紀、コトメデバハヤクハメデズ古今かきくらしことはふらなん云々菅万云々ことはねさへにほりてすててむ(下恋) コレラミナ同じ意也。コ、ナルハ其コトヲニツ重ネイヘル也クハシクハ隨筆ニイヘリ。<sup>(2)</sup>

とある。まず驚くのは用例の列挙の周到であることであるが、ここの解は後世の橋本進吉博士の「ことさけば』の『こと』と如の『ごと』および「ことさけば』の『こと』の語義について」の二論文を思い出させる個所である。これは博士の前論文において語義に関する処説として挙げられた八種類の中で、「(三)『此の如く』とするもの」に当たる解釈である。そこには

定家の頭註密勘に自分の伝受した説として「ことならば」を「此の如く」と釈してゐる(僻案抄にも)。毘沙門堂古今集注に「如此也二条義也」とある通り、この説が定家の子孫二条家相伝の説として行はれたらしい。近世に於ては、鹿持雅澄の万葉集古義にこの説を採つてゐる。

とある。<sup>(3)</sup>更に同論文では次のようにも述べられる。「荒木田久老は新に『かく(如是)』と解する説を唱へ、後、鹿持

雅澄は万葉集古義に於て『此の如く』とする説を主張したが、この両説はその内容に於ては殆ど同一のものである。橋守部は『かく』とする説を採り、香川景樹は『かくと』とする説を提唱したが、これも『こと』の語義解釈に於ては前両説と略同一のものである。(中略) その説をとらなかつた契沖でさへ『まことにいづれもしか心得れば通ずれど』(初稿本代匠記巻二)と云つてゐるやうに、すべての場合に妥当な解釈のやうに思はれ近年に至るまで誰も異議を称へるものが無かつたやうである」とあるのであるから、広足説もこの中に含まれるものであらう。橋本説は「こと」を「ごとし」の「ごと」と上代特殊仮名遣の一致するところ等によつて「同じこと……なら」の意に解せられたのである。更に、博士は「ことごとは」については次のように説明される。<sup>(4)</sup>

この「ことごと」は契沖が「異事なり。悉にはあらず。いとなき子をのこしおくほかの事は辛苦のあまりにしながらとおもへどの心なり」と註して以来、諸家ほとんど皆之に従つてゐる。然るに、近く井上通泰博士はこれを古今集の「ことは」と同じものとし、カクノ如クナラバといふ意に解してゐられる(万葉集新考)。これは「こと」を「かくの如く」とする説に拠つたものでそのまゝ之に随ふ事はできないが、この「ことごと」の上に「こと」は上述の「こと」であり、下の「こと」は事であるとすれば「同じ事」の義となり、「ことごとは死ななと思へど」は「同じ事には(同じ事なら)死ななと思ふが」の義となつて、意味もなだらかに通じるのである。多分この解釈が当を通たものであらうと思はれる。

これは井上通泰博士の説を称揚されたものであるが、既に中島広足が井上博士に先行していることを彼の万葉書き入りが物語っていることになる。

橘を屋前殖生 立ちてゐて 後に悔ゆとも験あらめやも (三・四一〇)

第二句を校異本(四十三ウ)ヤドニウエオフシとあるをウエオホセ(命令形)と改め、書き入れは本居説「第二句宿ニウエオホセと訓むべし」を引いて上欄に

春臣按 十九卷於保之 同二十卷於保佐牟ナトアレバ假字ハ オホセト書ベシ 此カナ古言梯ニモレタリ。  
とあつて大層手敵しい。これは「八衢補遺上」で「おほする」(負す) (下二段連体形) の例を引いて「万葉廿ゆきと  
り於保世 同三酒の名を聖と負師オホセシ 和名抄稻負鳥以奈於保世度里(中略) 本書例証なし、春海歌に ふぢとは花の名  
をおほしけんとあるは非也、おほせけんとあるべし」と述べたのと思ひ合わせられる個所である。このように用例を  
広く漁り、文法の活用形に照合して説くところ、まことに正当であり、次のような例にもそれは示されている。

古ゆ人の言ひ来る 老人の 変若云水曾 名に負ふ滝の瀬(六・一〇三四)  
第四句荒木田久老のヲチチフミヅゾの訓を避けて

春臣按 此変若ハヨツト訓ムヘシ此詞中二段ノ活ニテト、受タル上ナレバ ヲツト云ベキ也(四十オ)  
とある。「中二段の活」というような文法用語を用いていることなど、この種の注釈類には普通見られぬものであつ  
て、語学者・文法家としての面目躍如たるところである。

以上、挙げた事例二三についても広足の述べる所、著しく独自のものがあつて、既述の野田諸成はもとより、青柳  
種信・長瀬真幸等の遠く及ぶところでないことがよくわかると思う。九州の万葉学は、彼によつてはじめて正当な学  
問的軌道の上に乗せられたかの感がする。

さて中島広足における書き入れの本領は、多くの俗言、殊に肥後の方言などをしばしば例証の中に引用しているこ  
とである。これもまた他の真似できない優れたところというべきである。

万世に語り継げとし許能多氣仁 領巾ふりけらし 松浦小夜媛(五・八七三)

広足云 今モ嶽トノミ云トキハニゴラズ 肥後俗言 一ノタケ二ノタケ三ノタケト云モミナスミテイヘリ。(二  
十五オ)

第三句の多氣の清濁に関する記述で、内容的にはさして重要ではないが、熊本の西、金峰山の北尾根の呼称を思い出  
幕末における九州の万葉学

させる。西南役の古戦場でもあったという。

五月蠅なす さわく子供を 宇都呂豆波 死波不知……(五・八九七)

前出「ことは 死ななと思へど」の後続部であるが、

広足按 死波不知ハ死ヌヘキミチハシラズト云意ナルベシ 俗言ニイハバヲサナキ子ヲ打ステテ何分死ニハサレヌト云意ナリ(三十八オ)

何となく、肥後方言の「なにさま、死にやされん」を思い出すし、「うつてては」は五木の子守唄の「うっちんちゅうて(打ち死んだとて)」を髣髴させる語形である。

秋の田の穂田乃苺婆加 かより逢はば そこもか人の 今日か越ゆらむ(四・五二二)  
第二句について

春臣按 俗言ニハカユク ハカユカズトイフモ此ノハカヨリ出タル詞也。(十七オ)  
とある。いわゆる「はかどる」のハカも同源であろう。仕事の予定量、範囲の意である。

遠つ近江 伊奈佐堀江の 水平都久思 あれを頼めて あさましものを(十四・三四二九)

広足按 ミヲツクシハ浅キ所ニ立ツルモノ也。ソハ入江ニテモ中ノ方深ク左右浅キニハ其左右浅キ所ニタテ、中ノ深キ所ノミヲ舟ヲコガシムルハジメトスメリ。吾国ノ海ニモ在テコレヲミヲ木トイヘリサレバ此爰ニテハミヲツクシハタノメテトイフニモハラカ、レル詞也。(十五ウ)

悲しけく ここに思ひ出 伊良奈家久 そこに思ひ出……(十七・三九六九)  
天平十九年三月三日「更贈歌一首并短歌」、大伴宿祢家持の歌であるが

広足按 イラナケクハ オモヒシヨレテメメシクナリタルサマ也。大和物語ナルモカタチノオトロヘテ打シヨレタルサマヨイヘルニテ意カヨヘリ 和名抄ノ苛ハ肥後ノ俗ニイラサト云草ナルヘシ。コレ莉アリテ人ヲサス也。

俗ニイラツク、心ノイライラスルナル言同ジニテ、イラナク此ウラ也。(二十六ウ)

和名抄は「苛 音何和名伊良小草生刺也」とあるもの、「此ウラ也」は正しいとはいえないが、イラサはイタイタ草大蘇の類であろう。

秋風に なびく河辺の 尔故具佐能 にこよかにしも 思ほゆるかも (二十・四三〇九)

広足按ニニコグサハ和草也 イトナヨヤカナル草ニテ兒童ノ東ネ結ヒテ女ノ髪ノサマニシテ翫フ草也 肥俗ニヒイナ草ト云。(十四オ)

と見える。

日な曇り 碓氷の坂を 古延志太爾 妹が恋ひしく 忘らえぬかも (二十・四四〇七)

春臣按 古延志太爾ノ志太ハ時ト云意ニテコエシ時ニ也 西国ノ方言ニ今モ云コトニテ吾肥後ノ俗ニイキシナカ

ハリシナト云 此シナモ時ト同ジク行時帰時ノ意ナリ 十四ノ二十二丁トホシトフコナノシラネニアホ思太モア

ハノへ思太モナニコソヨサレ 此思太モ同ジ 又サマト云言ニモアタレリ コエシダコエサマ也。(三十六オ)

これは曾て拙考「碓氷の坂を越えしだに」(「万葉」十七集) 『碓氷の坂を越えしだに』続考(「語文研究」十八号)に述べたことがらであるから重複を避けたい。筆者は右説が正しいことを次の理由から主張した。即ち

1. 副助詞ダニが活用言の連体形を承接した例は、上代にない。

2. 最後の一線を示すという副助詞ダニの意味「せめて……ぐらいは」がこの場合適合せず、「……ただだけで」の意となることに不都合を感じる。

3. 歌意が「越える時」の方が率直で素朴、いわゆる「越えしな」の古形として「越えしだ」が考えられる。

4. アハノヘシダのごとく連用形承接の形は当然上代の接続形として連用形の連体機能として認められる。

等の理由によるものである。しかも「大言海」に「しだ(時)」の項があり、「越えしだに」の用例が掲げられている

し、その系統の解を示したと思われるものに折口信夫著「口訳万葉集」がある。思うに「大言海」の説くところは、「言海」も同じで、更に溯源すれば「増補雅言集覽」の解説に逢着する。

補 志だ 万廿ノ卅六こえ志太尔 十四ノ廿二あほ思太も あはのへ思太も 廿ノ廿六わすれも之太波 十四ノ卅かなしけ之太は

此詞みな時といふことと聞ゆるよし大平いへり、今も肥後にて行しな帰しなどいふしなは此思太の転じたるなり。(巻五十一)

「行きしな帰りしな」のような用法は、西日本の方言としてかなり広い分布を示すものであるが、肥後の俗言なるものが解決の糸口となった例で、これも広足の卓抜した方法というべきであろう。以上「中島広足書き入れ本万葉集」の書き入れを引用し、その優れた彼の万葉学の一端に触れた。

【註】

- (1) 弥富破摩雄著「中島広足」、「国学者伝記集成」「柵草子」五を引用。
- (2) 樞園文集（「中島広足全集」上）参照。
- (3) 橋本進吉「上代語研究」（著作集五、二二三・二二四頁）。
- (4) 右三三四頁。
- (5) 「中島広足全集」に語学関係の著書編纂がなかったのは惜しむべきであり、万葉関係の研究も「書き入れ本」のごとき編集できないものがあつたことを知らねばならぬ。

四 結 び

幕末における九州の万葉学を考える場合、万葉に関する著書もさることながら、書き入れ本による実情を探ってみることも必要ながらである。そのような観点から「種信書き入れ本万葉考」と「広足書き入れ本万葉集」を紹介

し、その内容を一瞥した。青柳と中島を万葉学の上から比較するということは、必ずしも当を得た処置とは考えられぬが、概ね次のごとくになるであろう。

青柳は士族の末端として不遇な実力者であったが、中島は裕福な武家の出身で早くから囑望されるころのあった人である。一人は著書類さして多からず、万葉学に専心した感があるが、一人は著述多面的に多く、万葉のみならず広汎な学識の所有者でもあった。学問的には一人は地味な努力家であったが、一人は派手な面を有する才能肌の人であった。一人は好古趣味で歌も万葉風の作歌をしばしばなし、一人は単なる好古ではもの足りず、長崎の文明開化の風潮にも関心を寄せた。というような対蹠的なものを感じるのである。学問的な方法においては、中島が一步進んでいたし、彼に追隨できる学者は九州には少なかつたから、それだけ器が大であったともいえるが、青柳はたしかに万葉学者といえる人物であった。二人の性格が二つの書き入れ本の中に奇しくもあらわれ、よく万葉学の二つの方向を特色づけているのは注目されてよい。

後記 本稿は、昭和五十一年十月五日万葉学会（於人吉市）において公開講演として発表した「九州の万葉学と書入本」ならびに、昭和五十二年六月二十五日、九州文化史研究所の研究発表会において発表した「幕末における九州の万葉学」なる二つの発表草稿を相補訂しつ成った。